

切 通 石 の 調 査

會 員 正 村 一 忠

序

名古屋新聞岐阜縣版(昭和14年6月15日附)に岐阜縣稻葉郡南長森村大字切通に隕石落下の現象を報道して居ます。

本會急報第351號に於て筆者は同様の報告をしましたが、其後同石を調査の末、下記の如き結果を得た故、誌上を借りて報告します。

觀 察 記 録

同石については筆者は去る6月15日、同26日の兩日に互り落下地を尋ね、目撃者の談及び現場や同石について調べたところは大概下記の通りである。

岐阜縣稻葉郡南長森村大字切通、村社伊豆神社境内にて同村小木曾むろ、常川せいの二人のお婆さんが子守をしてゐた6月12日(1939年)16時頃、大きな音響と共に同神社北側の竹垣に黒い石が當つて、小木曾むろさん(75歳)の右前方(小木曾さんは南向で居た)少しの地點に落ちて、それよりギリギリと廻つて南東の方角へ約30尺ころがつて止つた。吃驚した2人の中常川せいさん(60歳)が早速拾つたが、媛かみは感ぜられなかつた由。

以上の點より筆者の測定した同石の飛來方向は方位 N 13° 30' W, 高度(地平高度) 15° であるが、其の値は竹垣に當つた確かな痕跡が無いため、幾分精度が低い。

竹垣は矢來式にて、丸太材の主杭を用ひ、それに横竹を3本渡し、互に竹を交叉させた高さ約4尺位の垣根である。

落下地は壤土に近い砂土で出来て居て、表面は踏付られて居て割合に堅い。

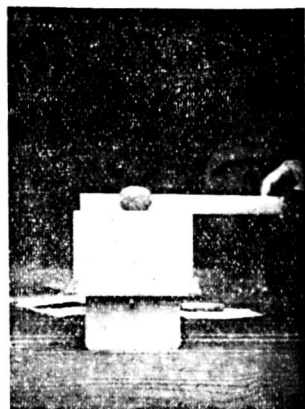
同石は落下地面に僅か同石大の凹みを作つた位である。

速度は緩であつたろうと想像出来る。

同石の重量は73.125g(19.5匁)、大きさは長さ4.9匁、横4.0匁、厚さ2.9匁。比重は水中に於ける重量39.75g(10.6匁)で $\frac{73.125}{33.375} = 2.19$ と云ふ結果になる。

形状は扁平鶏卵型、表面の色は黒色(石自身の色)で多くの小穴があり、ザラザラしてゐる。

表面に於ける特殊の状態は、クレイオン(赤、褐、茶、青、緑、黒色)が微



量宛(但し黒は割合に多量一ヶ所に)附着して居る事、幾分腐殖せる木材繊維が輕石狀を呈せる表面の小穴部に嵌入して居る事、表面は燃燒の事實を認め難い事、表面の小穴部に落下地以外の砂礫と覺ゆる細砂が嵌入して居る事である。

光澤はない、種類は石質である。

磁性も認められない、無味無嗅の石塊である。

大體以上が同石に關して調査した資料である。

推 理

以上述べ來つた如く、同石に關しての大體を知られました事と存じますが、其の調査に依つて來る所は、同石は落下直後拾得し、大切に保存せられたるにも不拘、其の表面に、人爲的に附られたと思はれるクレイオンの微量が附着して居り、其の上其の表面の小穴部に地上に存在する岩石にはありと推定する事の出来る木材繊維が嵌入して居る事實、且表面の燃燒せる事實なく、それに比重も3以下にて隕石として認める事が出来ない。故に切通に落下せりと報ぜられたる同石は隕石にあらずして、地上の岩石であると斷定出来る次第であります。

結

以上の如く結論としては岐阜縣稲葉郡南長森村大字切通、村社伊豆神社境内に於る6月12日落下せりと云ふ一石は隕石に非ずして地上岩石であるといふ結果になる。

以上を以つて本協會急報第351號の切通隕石に關する記事に對する後報とした次第であります。筆者が再度に亘る、かゝる研究の機會を恵まれたる事は大きな喜びであります。(1939, 七, 23)

支那語に譯された天文及び氣象學書

中國に於ける科學書の翻譯史は、周昌壽氏の「譯刊科學書籍考略」に據れば、略3期に分けて説明されてゐる。其の内、第3期の民國以後今次事變前に至る間に於ける譯書の出版は495種に達して居る。そして夫等の殆んど全部が中國人の自力に依り翻譯されたものであり、日本科學圖書の譯出されたものも非常な増加を示し、天文及び氣象學書では日文12、英文17、獨文1、佛文1、其他2、計33冊となつて居る。(中國文化情報より)

星 と 雜 誌

俳句雑誌に「火星」、短歌雑誌に「星雲」「光」があり、人民戦線派と目さるゝ同人雑誌に「星座」がある。